

一、次の文章を読み、以下の問いに答えなさい

西暦1000年から1900年まで、ずっと3万人規模きぼだった地域が、その後の1000年で10万人になったとする。さらに2000年から1000年かけて、かつてと同じく3万人の人口規模に戻るとしても、その①人口構成はかつてとはまったく違ったものになるはずだ。かつての3万人は若い人が多く、高齢者が少ない人口ピラミッドだったはず。ところが、これから迎える人口3万人は若い人が少なく高齢者が多い人口ピラミッドになる。したがって、単純に昔へ戻ればいいというわけではない。Ⅰが多い3万人でどう楽しく生きていくか。若い人と高齢者がそれぞれの持ち味を活かして幸せに生きていくことができるか。これは、ある程度過去に学びつつも、②まったく新しい生き方のビジョンが必要になる時代だといえよう。

そのヒントは、すでに日本の中山間離島地域でいくつか誕生している。Ⅱたちがポツポツと都会からア田舎へ移動し始めているのだ。(①)、「まさかこんな場所で？」と思うような山奥で、ポツリとカフェを営んでいる若者がいる。離島で雑貨屋を営んでいる夫婦がいる。そんな人たちの話を聞いていると、これまで気づかなかったことを気づかされることが多い。(②)、「そんな田舎でカフェや雑貨屋をやってお客さんは来るのか、ということが気になる。(③)「来る」そうなのだ。田舎でカフェがオープンしたという噂うわさは一気に広がる。近隣の町村にまで広がる。地元の若い奥さんや高齢者などが、「わがまちにもカフェができた」と喜びイ勇んで来店する。都会から友達が遊びに来たときにも、田舎の良さを活かしたウ雰囲気うふきのいいカフェに連れて行きたいと思うらしい。友達が友達を連れてカフェを訪れる。毎月、おしゃやかなエ雑誌エが読めるというのもありがたいそうだ。③こうした理由から、田舎のカフェには定期的にお客さんがオ訪れる。東京の渋谷でひとつのカフェがオープンしてもそれほど話題にならないかもしれないが、田舎に農家を改装したカフェができたという噂は多くの人に影響を与え、来店する気持ちうながを促すことになる。その結果、カフェで地域の人たちと偶然会うことになることも多い。そこでいろいろ話をするうちに、自分たちの将来について、集落の将来、まちの将来についても話し合うことがあるという。中山間離島地域でワークショップをすると、1回目と2回目との間に明らかにどこか別の場所に集まってまちの将来について話し合ってきたな、と感じるようなチームと出会うことがある。よくよく話を聞いてみると、チームの何人かが偶然カフェに居合わせて、いろんな話をするうちに「そういえばこの前のワークショップのときの話だけださあ」という話題になるそうだ。町役場に集まる公式なワークショップの場以外に、参加者たちがⅢに集まって話し合うカフェでの会話が、結果的にまちづくりの話し合いを加速させることになっているというわけだ。

こうしたカフェを営営する人に聞いてみると、「儲もかりはしないけど生活はしていける」と答える人が多い。

山崎 亮 『コミュニティデザインの時代』

問一 太線部ア～オの読みがなをひらがなで答えなさい。

問二 (①) (③) に入る語として適切なものを選び、記号で答えなさい。

ア ところで イ ところが ウ まず エ たとえば オ また

問三

I	II
---	----

 に入る言葉の組み合わせとして適切なものを選び、記号で答えなさい。

- | | | |
|---|-------|--------|
| ア | I 高齢者 | II 若者 |
| イ | I 高齢者 | II 高齢者 |
| ウ | I 若者 | II 高齢者 |
| エ | I 若者 | II 若者 |

問四 傍線部①「人口構成はかつてとはまったく違ったものになる」とありますが、どのようなになると書かれていますか。本文中から二十字で抜き出さない。

問五 傍線部②「まったく新しい生き方のビジョン」とありますが、中山間離島地域では具体的にどのような生き方をしている人がいると述べられていますか。本文中から二箇所、十二字でそれぞれ抜き出さない。

問六 傍線部③「こうした理由から」とありますが、どのような理由からでしょうか。適切でないもの一つを選び、記号で答えなさい。

- ア 若い奥さんや高齢者が喜び勇んで来店するという理由。
イ 田舎であってもおしゃれな雑誌が読めるという理由。
ウ 都会の友達に連れていってもらいたいと頼まれるという理由。
エ 来店した人が友達を連れてまた訪れるという理由。

問七

III

 に入る言葉として最もふさわしいものを記号で答えなさい。

- ア 不公式 イ 不公開 ウ 非公式 エ 非公開
- 問八 本文のまとめとして適切なものには○、そうでないものには×と答えなさい。
- ア 人口が減ることが予想されるため、人口を増やすことを意識するべきだ。
イ 田舎から都会ではなく、都会から田舎へ移動する生き方も考えるべきだ。
ウ 地域の人々は自分たちの将来だけでなく、地域の将来についても考えている。
エ 都会から離れた田舎ではカフェ等を経営することが難しく、改善を考えるべきだ。

二、次の文章を読み、以下の問いに答えなさい

主人公の慎一と春也は森の中にある秘密の場所に鳴海を呼んだ。以下の文は、春也和鳴海で秘密の場所のシンボルである「ヤドカミ様の岩」を飾ろうとしている場面である。

「これ使う？」

「なんて？」

「鍵でテープの端を押さえて、あぶればいいんじゃないかと思って」

「ああ、そやな」

鳴海が手渡した車の鍵を使い、春也はさらに（あ）と作業を進めていった。

①胸に、だんだんと湿った砂が溜^{たま}まってい^いく。その砂は、自分が春也の手際に驚いてみせたり、鳴海の賞賛に同意するたびに嵩^{かさ}を増してい^いった。

A「思ったよりええやん」

夕陽を受けてオレンジがかった岩を、春也は満足そうに眺めた。岩は三色のリボンで綺麗^{きれい}に飾り付けられていた。アイゼンに二人でつくった※シユロ紐^{ひも}の注連縄^{しめなわ}だけは、そのまま残してある。

B「けっこう遅くなっちゃったね」

鳴海がイハイゴの太陽を振り向いた。

C「今日はもう帰ろうよ、暗くなるから」

D「そやな」

地面に散らばったテープの切れ端を、慎一と春也でウヒロ^{ウヒロ}った。鳴海は自分の持ってきたハサミをバッグに仕舞い、それからしばらく地面を（い）と見回していたが、やがてその顔にふとエコマった表情が浮かんだ。

「ねえ、あたしの鍵、知らない？」

「さっき返さへんかったか？」

「もらったっけ」

どちらも、同意を求めるように慎一のほうを向いた。慎一は黙って首を横に振った。

「ほんなら、とりあえず探そか」

「ごめんね」

三人で背中をこごめ、地面を覗^{のぞ}き込みながら岩のまわりを確認した。鳴海の鍵はどこにもない。それぞれ自分のポケットやバッグの中を見たり、さっき集めたゴミの中を掻^かき回してもみたが、やはり出てこなかった。そうしているうちに、太陽がさらに低くなり、地面の小石が尖^{とが}ったぎざぎざの影を伸ばしはじめた。

「もういい、諦^{あきら}める」

夕焼けた空を、鳴海が不安げに振り向いた。

②そういうわけにいくかいな」

責任を感じているらしく、三人の中で春也が一番懸命に探していた。

「ぜったい岩のまわりにあるはずなんやから」

「でも、暗くなっちゃう。つぎ来たときに見つかるともかもしれないし、もし見つからなくっても大丈夫だよ。ふだん使っていないスペアキーだから、きっとお父さんにもばれないし」

「あかんて」

振り向きざま春也は言ったが、すぐにまた地面に顔を戻した。

「でも、あれやで。二人は先に帰ってもええで。俺、一人で探すし」

③地面を覗^{のぞ}みつける横顔は真剣そのもので、両目には焦りが浮かんでいた。あちこちに生えているヒトリシズカの葉の下まで、春也は覗^{のぞ}き込んだので、両手も両膝^{ひざ}もすっかり土で汚くなっている。その様子を鳴海はしばらく黙って見ていたが、やがて耐えきれなくなつたように春也の背中へ近づいていった。

「いいって、もう」

春也のTシャツの肩を、鳴海はつまんだ。

「ほんとにいいから」

春也は鳴海に顔を向けたが、ふてくされたように目をそらした。

「ほんなら明日、また探すわ」

鳴海は黙^{うなず}って頷いた。

「かんにんな」

風に、夜の匂いがオマじりはじめていた。西の空は（う）赤らんで、ヤドカミ様の岩は影絵に変わり、反対側を見ると、海の向こうには白い月が（え）と浮かんでいる。

④急いでいたせいもあり、山道を下りているあいだはほとんど誰も口を利かなかった。いつもよりずっと短い時間でガドガドの裏まで行き着いたとき、三人ともすっかり息が上がつていた。空が暗くなりかけていたので、はずんだ息のまま短く声を交わして三人は別れた。

家路をたどっていると、幼稚園で盗んだ白いクレヨンのがまた思い出された。暗さを増していく行く手の道を睨みつけたまま、慎一はポケットに右手を差し入れた。

鳴海の鍵が、指先に触れた。

道尾 秀介 『月と蟹』

※ シュロ紐の注連縄 … ヤシ科の木の紐で災いを払う結界として縄を張られる。

問一 太線部ア～オのカタカナを適切な漢字に直しなさい。

問二 （あ）（う）（え）に入る言葉として適切なものをそれぞれ選び、記号で答えなさい。ただし、記号は一度しか使用してはいけません。

アののろろ イ うつすら ウ きよろきよろ
エ まざまざ オ いよいよ カ てきばき

問三 [A] [D]はそれぞれ誰の発言ですか。適切なものを選び、記号で答えなさい。

ア A 春也 B 鳴海 C 慎一 D 慎一
イ A 春也 B 鳴海 C 鳴海 D 春也
ウ A 春也 B 慎一 C 鳴海 D 慎一
エ A 慎一 B 春也 C 慎一 D 春也

問四 二重傍線部「やはり出てこなかった」とありますが、この文の主部として最も適切なものを選び、記号で答えなさい。

ア 鳴海の鍵は
イ 自分のポケットや
ウ さつき集めたゴミの中を
エ 搔き回してもみたが

問五 傍線部①「胸に、だんだんと湿った砂が溜まっていく」とありますが、これは慎一のどのような気持ちを表していますか。最も適切なものを選び、記号で答えなさい。

ア 自分を裏切って、鳴海と話している春也をうらむ気持ち。
イ 鳴海に良く思われている春也をほこらしいと思う気持ち。
ウ 春也が鳴海を意識して行動していると、あわれむ気持ち。
エ 相手に合わせて話をしている自分に息苦しく思う気持ち。

問六 傍線部②「そういうわけにいくかいな」とありますが、春也はDoingすることができないのでしょうか。本文中の言葉を用い、十五字以内で答えなさい。

問七 傍線部③「地面を睨みつける横顔は真剣そのもので」とありますが、その理由を次のようにまとめる時、に入る言葉は何ですか。本文中から十字以内で抜き出さない。

春也は鳴海から借りたものをなくしたと考え、ため真剣であった。

問八 傍線部④「急いでいたくなかった」とありますが、急いでいた以外に口を利かなかった理由として最も適切なものを選び、記号で答えなさい。

ア 慎一が鍵を隠し持っていることを二人に知られてしまったから。

イ 三人はなぜ鍵が見つからなかったのか不思議に思っていたから。

ウ 鳴海はあたりが暗くなっていることに不安をいだいていたから。

エ 春也は慎一が鍵を持っているのではないかと疑い始めていたから。

問九 本文の説明として最も適切なものを選び、記号で答えなさい。

ア 「これ使う?」「なんて?」のように「?」を文章でたくさん使うことによって、子どもが結論を出すことの難しさをわかりやすく表現している。

イ 「黙って」という言葉が何度も使われており、静かな場所にいることが強調されると同時に、子どもたちの口数の少なさがあらわされている。

ウ 「影絵」「白い月」のように自然の描写を文章にちりばめることによって、子どもの自由な発想が効果的にえがかれている。

エ 「暗さを増していく行く手の道」のように風景描写と鍵を隠し持った慎一の暗い心情を重ねて表現している。